

飢餓地獄の中で野垂れ死にの憂き目を見る

福田 征機

1 おじの出征と死

私の母の二人の弟（叔父）のうち、長男は中国大陸から帰ってきたが、次男はビルマで戦死した。長男は昭和 12（1937）年 9 月から終戦まで 3 回出征、第 1 回目の出征では「南京攻略戦」「徐州会戦」「武漢作戦」などを戦った。

「南京攻略戦」は、昭和 12 年 12 月、日本軍が中国の首都南京を攻略した際に中国軍の捕虜・敗残兵および一般市民に対して行った攻略戦で、欧米ではナンキン・アトロシティーズ（南京大虐殺）と呼ばれている。叔父はこの残虐な加害行為に対して終生一切語らなかった。

2 回目の出征（昭和 15 年）では、中国での戦争が泥沼化し、各地で一進一退を繰り返し戦況は陰しくなってきた。3 回目（昭和 18 年）は、投入総兵力 50 万人による「大陸打通作戦」の後半部、「湘桂作戦」に参加した。大規模な攻勢作戦で地域の占領に成功したが、戦略目的は十分には実現できなかった。

次男は、昭和 14 年と 17 年に出征し、昭和 19 年 6 月 16 日、史上最悪の作戦と言われる、インパール作戦で戦死した（行年 26 歳）。兵士たちの証言によると、インパール作戦では、食料がない、マラリヤ・赤痢に罹った、などが原因で多くの兵士が亡くなっている。

大陸打通作戦（たいりくだつうさくせん）

日中戦争中の昭和 19（1944）年に、日本軍が中国大陸で行った作戦。主として、中国大陸を南北に縦断する鉄道等を確保することにより、南方資源地帯（東南アジア）と日本本土を陸上交通で結び、資源を確保する事を目的とした。

インパール作戦（さくせん）

昭和 19（1944）年に、イギリスの中華民国への援助を遮断するために日本軍によって行われた、インド北東部の都市・インパール攻略を目指した作戦。補給を軽視したことにより、日本軍は多くの犠牲を出し、作戦は失敗に終わった。

本作戦は、日本軍参加将兵約8万4千人、うち戦死者3万2千人、戦病死は4万人、戻れたのは1万2千人だった。つまり、参加した86%の将兵が戦死したことになる。この戦いは、戦病死の割合が56%となっている。インパールにはイギリス軍の前線基地があり、中国向けの航空輸送基地があった。昭和19（1944）年3月、インパール作戦は開始された。日本軍にとって、最大の課題は、武器・弾薬・食料の輸送と補給であった。司令官牟田口廉也^{むたぐちれんや}中将は、軽装奇襲の方針のもと、強引な戦いをはじめたが、雨期の迫る5月からはイギリス軍が反撃に転じた。日本軍は、戦死者が続出し、食料・弾薬がつきて退却を始めた。

7月、全員の総退却が始まったが、牟田口は幹部を集めて次のように訓示した。「諸君、佐藤兵団長（第三十一師団、通称号：烈^{れつ}）は、軍命に背き^{そむ}コヒマ方面の戦線を放棄した。食う物がないから戦争は出来んと言って勝手に退きよった。これが皇軍か。皇軍は食う物がなくても戦いをしなければならないのだ。兵器がない、やれ弾丸がない、食う物がないなどは戦いを放棄する理由にならぬ。弾丸がなかったら銃剣があるじゃないか。銃剣がなくなれば、腕でいくんじゃ。腕もなくなったら足で蹴れ。足もやられたら口で噛みついて行け。日本男子には大和魂があるということを忘れちゃいかん。日本は神州^{しんしゅう}である。神々が守って下さる・・・」。

しかし、この退却こそは、悲惨の極みであった。約70日間、食料の補給ゼロ、数十日も米を食べず、馬の餌^{えさ}とか草の葉とかで飢えをしのいだ。兵士たちのほとんどは、マラリヤ・脚気^{かっけ}・アメーバー赤痢^{せきり}にかかった。戦傷の傷口にうじ虫を這^はわせ、泥沼となった密林のなかをさまよった。

2 父の召集、北海道へ疎開

敗戦が色濃くなってきた昭和20（1945）年、私は福岡県直方市に居た。父はここで三菱の炭鉱の労務をしていた。家族は、父、母、兄、私の4人だった。2月、父が召集され、第147師団に編成されて、千葉縣市川市で帝都防衛の任にあたることになった。

帝都（ていと）

当時、国号を「大日本帝国」と称していた日本の首都、東京を指した語。

父の召集は本土決戦に備えるためのものだった。

日本軍は本土決戦にあたり、「決号作戦」^{けつごう}と称する防衛作戦を策定した。第 147 師団は、急造された 54 個師団（沿岸配備師団）の一つで、本土決戦第一次兵備として、昭和 20 年 2 月 28 日に編成された。兵力の欠乏を補うため、男子 15 歳から 60 歳、女子 17 歳から 40 歳までが根こそぎ動員された。

父が召集された後、北九州地方には日本有数の炭田と八幡製鉄所などがあり、爆撃される危険性があるということで、私たち母子 3 人は 3 月、母の姉夫婦が住む北海道の洞爺に疎開した。途中、通過した東京で、10 万人以上の人々が亡くなったという東京大空襲（3 月 10 日）の焼け跡や、廃墟にたむろす被災者の姿が、今も目に焼き付いている。

洞爺に疎開して 4 カ月経った 7 月 14・15 日、室蘭が空襲と艦砲射撃を受けた。延べ百数十機によって、工場や船舶、市街地などに爆撃が加えられ、室蘭港内外の艦船や、船舶の多くが沈没した。陸上では日鉄、日鋼、函館ドック室蘭造船所、埠頭倉庫^{ふとう}などが艦砲射撃を受け、死亡者 480 人を出した。室蘭が爆撃を受けた後、洞爺も危なくなつて、7 月、私たちは親戚^{しんせき}を頼って佐呂間町へ疎開した。

8 月 6 日広島、9 日長崎に原爆投下、14 日、日本はポツダム宣言を受諾して無条件降伏、終戦となる。終戦時、千葉に居た父は、9 月にはもう佐呂間に迎えにきて、一家揃^{そろ}って九州に帰ることになった。帰路、大阪までは鉄道で行けたが、それ以上は無理だったので、鉄道の乗客が自分たちで漁船をチャーターし、船で瀬戸内海を渡った。甲板からは、空襲を受けて破壊された船の残骸^{ざんがい}と思われる、鉄製や木製のいくつもの構造物が流れてくるのが見えた。

（ふくだ まさき 昭和 17（1942）年 福岡県直方市生まれ）

艦砲射撃（かんぽうしゃげき）

軍艦が搭載する大砲（艦砲）による砲撃。

ポツダム宣言（せんげん）

1945 年 7 月 26 日にベルリン郊外のポツダムで発表された日本の戦争終結条件を示したアメリカ、イギリス、中国 3 カ国（のちにソ連も参加）首脳^{しゅなん}の宣言。日本の軍国主義の除去、軍事占領、主権の制限、戦争犯罪人の処罰、再軍備禁止などについて規定している。日本は 8 月 14 日、これを受諾した。